

## 日本のお墓はこれからどうなるのか、 どう向き合っていくべきか

— NPO手元供養協会10周年記念シンポジウム「日本のお墓のゆくえ」

2015年9月12日、NPO手元供養協会が主催するシンポジウム「日本のお墓のゆくえ」が東京のアットビジネスセンター渋谷駅前前で開かれ、葬送や供養、墓石業界の関係者ら約70名が詰めかけた。

協会10周年を記念したこのシンポジウムの狙いについて、会長の山崎譲二氏は冒頭に「今まさに日本のお墓は大きく変わろうとしている。しかし、その方向性が見えないという状況。さまざまな立場で葬送に携わる専門家の方々からお話をうかがい、これからの葬送を考えていきたい」と説明している。

### 本質にあるのは用える関係性

第一部の基調講演では、第一生命経済研究所主任研究員の小谷みどり氏が登壇。「日本のお墓の現状とこれから」について講演した。

### ●小谷みどり氏

お墓に関する意識の変化について、3つの観点があります。一つは、お墓



第一部で基調講演を行う小谷みどり氏

は「あの世の住まい」という捉え方が増えたこと。お墓はじなくなった個人や夫婦のものという意識が強まっています。主に奥さんの好みに依った明るく色の墓石などが顕著に売れているのです。一方で、2009年に私が実施した全国調査によると、先祖代々の墓に入りたいという人は4割を切っています。墓自体いらないう人も2割に達しています。先祖代々のお墓に入るのが当たり前という考えから、誰とどこに住むかという住宅選びと同じ感覚に変わってきているわけです。

もう一つが、「生きた証を残したい」という考え方。民間霊園では、故人が好きだった言葉が刻まれた墓石や、故

人の生き方を象徴するような形状の墓石が増えています。子々孫々継承される前提で建てていないのです。最後の一つは、「子どもに迷惑をかけたくない」というものです。迷惑をかけたくないからお墓はいらないと考えたたり、散骨を希望したりという人は増えています。また、残された遺族が姪や甥などちよつと距離が離れた人しかいないといった事情を抱えた方も結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

このように多様化が進む一方で、「年にお墓参りをほとんど行かない」という人は1割未満で、墓参り行為は定着しています。現代の日本人は「自分が死んだら無」と考える人が多いですが、その一方で大切な人がなくなったときはそうは考えていない。どこかで見守ってくれている。手を合わせれば会える気がする。その拠り所は必ずしも従来どおりのお墓でなくてもいいわけです。今後ともさまざまな形が出てくると思

いますが、核心のところにあるのは故人と遺された人との関係性だと思

たわけです。今の家は昔の家とまるで違う。核家族化や共同体の解体が進んで、50年くらいしか続かないのが当たり前になっていきます。結婚して子どもが生まれて、子どもが果立って、年離れた夫婦が順に亡くなっていく。それが50年くらい。

このなかで、多くの人は家族の一員としてではなく、本当にただの一人の個人として死んでいくわけです。そうなるのと、お墓の形態が昔と変わっていくのは必然的なことなのです。この変化は日本の社会にとって非常に重い意味をもちますが、今まで考えることを避けてきた。その矛盾が今お墓に現れているわけです。「0葬」もそうですが、だからこそ、いろいろな葬送についての考え方を示して、世に問う必要があるのだと思います。

### ●本田圭子氏

(遺言相続サポートセンター理事)

これからのお墓を考えると、亡くなる本人と家族とのコミュニケーションが今後重要になってくると思います。

個人的な話ですが、昨年がんで亡くなった母は永代供養墓を希望していました。トラブルなく実行できました。それは生前から父や子どもたちと相談したうえで決めてくれたからで、何の相談もなかったら、そうはいかなかったでしょう。

私は長らくエンディングノートを推奨してきましたが、最近では死後のことも含めて自分のことは自分で決めるという風潮が強くなってきていると感じています。それ自体は良いことだと思います。一存で決められない領分まで決めてしまおうとなるのは危険です。とくに葬儀やお墓に関しては実際に実行するのはご家族なので、理解を得るよう努める必要があります。

### ●村田ますみ氏

(日本海洋散骨協会代表理事)

これからの葬送の一つとして海洋散骨の可能性を伝えさせてもらっています。今年8月後半から3週間かけて我々が実施した海洋散骨に関する全国アンケート(有効回答数1247件)によると、海洋散骨について93%の人が知っています。10%の人が海洋散骨した人が周囲にいると答えています。海洋散骨に参加したことがある人は3%でした。予想以上に大きな数字になっています。と我々も驚きました。

一方、自ら散骨を希望するかについて

では、希望する人が11%で、望まない人が50%、わからないとの回答が39%となっています。

海洋散骨以外では樹木葬を利用したという声が目立って多かったです。全体としてはまだどんな葬送の手段があるのか情報をもっていない人が多く、考えたことがないという人が多勢という印象です。今後はその辺りの情勢を考えていく必要があるとすね。

### 墓石の受注は昨年の3分の1

### ●河野篤史氏

(日本石材産業協会顧問・静岡の石材店六代目)

これまでのお話やアンケート結果をお聞きして、背筋が寒くなってるところがあります(苦笑)。石屋は今とてもアップアップしています。石材問屋さんからは墓石の受注が昨年と比べて3分の1に減ったという話も聞きます。皆さんお墓を作らなくなっています。実際、私の店で電話を受けても、墓石の注文ではなく、墓じまいの相談が多いんですね。「爺さん婆さんの骨は永代供養墓に移して、自分たちもそこにいようから」と。

今、現場を見ると、個人のお墓は二極化が進んでいて、伝統的なものを好む方と自分流を求め方、肌感覚でいうと両者が拮抗しています。手元供養も他の葬送の手段も大切だと思

す。それがないと申いは成立しないのではないのでしょうか。心の結びつきがいかにか維持され育まれるか。その問題がこれからのお墓のあり方をすこく大きく左右すると思います。

第二部のパネルディスカッションでは、さまざまな立場で葬送に関わる専門家がそれぞれの立場で問題提起した。

### 今の家は50年くらいしか続かない

### ●島田裕巳氏

(宗教学者・葬送の自由をすすめる会会長)

戦前戦後で一番何が違うかという点で家父長制の有無です。戦後はその制度がなくなりましたから、その頃から昔ながらの家制度は崩壊する宿命にあっ

ていかなければと感じています。

そのほか、即宗院住職で臨済宗東福寺派教学部長の杉井玄慎氏による供養のあり方についての講演や、協会顧問で東京電機大学名誉教授の八木澤壯一氏による墓参り代行業の現状に触れる発言もあった。いずれにしろ、迫り来る変化について否定する声はなく、見通しが見えないなかで選択肢を提示するという当初の狙いとおりの提案が並べられた感がある。

〔古田雄介〕



左から、方丈の「モーニングジュエリー」と博國屋の「おもいで碑」、方丈の「花歴プレスレット」、興福舎の「六角舍利」。いずれも協会所属の企業による手元供養品



第2部のパネルディスカッションの様子。左から八木澤壯一氏、山崎譲二氏、河野篤史氏、本田圭子氏、村田ますみ氏、島田裕巳氏、杉井玄慎氏



会場入口付近には協会所属企業による手元供養品の数々が置かれていた